

に対して、化学療法に加え、照射療法・計 70Gy を行なうことによって、完全寛解に至った2症例を経験した。

この2症例に共通したこととして、①腺癌である。②縦隔進展を認める。③遠隔転移を認めない。④CEA 高値である。⑤放射線治療が有効とおもわれる。といった5項目があげられた。特に CEA に関しては、2症例において治療前にはそれぞれ、278ng/ml, 3177.2ng/ml と著明高値であったが、照射6カ月後には、ともに、5.1 ng/ml, 5.9ng/ml と正常域に入り、その後も上昇を認めていない。以上のごとく、共通した上記5項目をもった肺癌があるのではないかとおもわれた。

6) 末梢神経障害が先行した肺小細胞癌症例の検討

○宮尾 浩美・水沢 彰郎
佐藤 和弘・野沢 悟
嶋津 芳典・田辺 肇
中島 喜章・永井 明彦 (新潟大学)
来生 哲・荒川 正昭 (第二内科)
斉藤 豊・原山 尋実
湯浅 龍彦・宮武 正 (同神経内科)

最近当科で経験した remote effect によると思われる末梢神経障害が先行した肺小細胞癌3例について報告した。

3症例の組織亜型は、いずれも oat cell type で、Stage はⅢおよびⅣであった。各々先行期間は、11カ月、4カ月、2カ月であった。1例目は感覚性 neuropathy が主であり、2例目は感覚・運動 neuropathy が認められた。3例目は検索不可能だった。また1例目のみ antineuronal antibody は、陽性であった。化学療法施行により、3例とも胸部レ線に改善認められたが、神経症状は不変であった。

本症の早期発見と原疾患に対する早期治療が必要と思われる。

7) 非小細胞肺癌に対する High dose-CDDP 療法の pilot study

○横山 晶・木滑 孝一 (新潟県立がんセンター新潟病院内科)
栗田 雄三

1989年2月より High-dose CDDP 療法の pilot study を開始したので報告する。High-dose CDDP 療法は、CDDP 80mg/m² (i.v.) を3%食塩水 250ml に溶解し、3時間で day 1, 8 に点滴静注し、VDS は 3mg/m² を day 1, 8 に静注した。以上を1コースとし以後4週毎に繰り返した。また CDDP の血中濃度を測定し、Pharmacokinetics を解析した。登録症例は6例で、全

例が評価可能であり、組織型は肺腺癌2例、肺扁平上皮癌2例、その他2例であった。治療成績は、CDDP 単独投与の2例は NC で、CDDP+VDS の4例はいずれも PR であった。いずれも寛解持続中で、生存中である。副作用は、VDS 併用例で白血球減少が著明であったが、腎毒性は認められなかった。軽度の難聴を2例に認めた。非小細胞癌に対する High-dose CDDP 療法は3%の高張食塩水を併用すること、投与量を day 1, day 8 に分割することで、腎障害を防止でき、その他重篤な副作用も認められず、奏効率は VDS を併用することで、向上することが期待された。

8) 左房合併切除を行った肺癌症例の検討

大和 靖・広野 達彦
小池 輝明・滝沢 恒世
相馬 孝博・吉谷 克雄
中山 健司・土田 正則 (新潟大学)
江口 昭治 (第二外科)

教室で経験した左房合併切除肺癌4例を検討した。全例60才台の男性で、下葉原発の扁平上皮癌であった。術式は肺摘除が3例、胸膜肺全摘除が1例であった。左房合併切除の方法は、鉗子下切除が3例、体外循環下切除が1例であった。体外循環下切除の1例は、欠損部をパッチ補填した。術後 TNM 分類は、T4N0M1 (肝転移) が1例、T4N2M0 が3例であった。根治度は、M1 症例が絶対的非治癒切除であったが、他の3例は相対的治癒切除が得られた。転帰は、3例が術後5カ月以内に死亡したが、1例は3年5カ月の現在、再発なく健在である。以上左房浸潤肺癌に対しても積極的な外科治療を行うことにより、長期生存も期待できるものと思われる。

9) 末梢部発生扁平上皮癌の臨床病理学的検討

渡辺 恒・金井 至
本間 慶一・大西 義久 (新潟大学第二病理)
江村 巖 (新潟大学附属病院)
病理部

〔目的〕：末梢発生肺癌に腺癌が多い事は衆知の事実だが線維化、胸膜陥入を伴う扁平上皮癌も稀でない。今回、末梢発生扁平上皮癌を臨床病理学的に検討したので報告する。

〔対象と方法〕：過去5年間に切除された肺癌症例は279例あり、このうち32例の末梢発生扁平上皮癌を検討した。

〔結果〕：腫瘍分化度では低分化癌の比率が高く、また肉眼的特徴として胸膜陥入は53.1%、空洞形成は50%、線維化は56.3%に認められた。末梢発生腺癌に比して

T₃, T₄ および P₂, P₃ の比率が高く, また Secretory component (SC) は 22.7% に陽性であった。

〔考察〕: 1) レ線学的に空洞形成・胸膜陥入を伴う末梢部腫瘍をみた場合扁平上皮癌を疑う必要がある。2) 末梢発生腺癌と比較し, 特に p 因子は重要で腫瘍局所進展が予後に影響をおよぼすものと思われる。3) 腺癌類似の病理形態学的特徴, SC の陽性所見等から肺門発生扁平上皮癌と質的に異なる可能性がある。

10) 中心にほとんど瘢痕形成のない肺腺癌の病理学的検討

江村 巖 (新潟大学附属病院 病理部)

渡辺 恒 (岡第二病理学教室)

我々は瘢痕形成のない肺腺癌症例を経験したので, 瘢痕の少ない腺癌及び Atypical alveolar cuboidal cell hyperplasia (AAH) を含め検討した結果を報告する。瘢痕の程度, 癌細胞の分類は下里等の分類に従った。気管支上皮細胞やクララ細胞への分化を示す細胞からなる腫瘍の場合腫瘍の周辺部分でも腫瘍の中心部分でも間質に沿って増殖している腫瘍細胞の核の面積はほぼ同じであった。しかしこれとは別に胸膜の陥入のある部位ではクララ細胞への分化を示す細胞から成る癌と判断できる領域があるが周辺部では AAH と病理組織学的に鑑別できない部位がありこの間に形態学的な移行のある症例があった。このような症例の腫瘍周辺部の腫瘍細胞の核面積は平均 30 μ m², 中心部では 50~70 μ m² であり危険率 1% 以下で有意差があった。さらに AAH の細胞の核面積の平均値もほぼ 30 μ m² であった。このことは後者の腫瘍が AAH を発生母地としていることを示唆しているものと推定された。

特別講演

肺癌における内視鏡的治療

国立がんセンター放射線治療部

小野 良祐 先生

第18回新潟救急医学会

日時 平成元年7月15日(土)

午後2時より

会場 新潟大学医学部大講堂

一般演題

1) 硫酸マグネシウムが有効であった心室頻拍の2例

三井田 努・本多 拓 (新潟市民病院 救命救急センター)

庭野 慎一・小田 弘隆
佐藤 広則・樋熊 紀雄 (同 循環器科)

硫酸マグネシウム (MgSO₄) 静注が有効であった薬剤起因性 Torsades de pointes (Tdp) の2例を経験した。症例1は79才女, PSVT による心不全のため入院。PSVT は af に移行し, Verapamil, Procainamide 経口投与により接合部調律となったが, QT 間隔が 0.60 秒に延長し, Tdp が頻回に出現した。血清 Mg は 2.0 mg/dl と正常であったが, 薬剤起因性 Tdp と診断し MgSO₄ 2.47g 静注した。QT 間隔の短縮はなかったが, 投与直後より Tdp は消失した。症例2は71才男, af のため Disopyramide 300mg の投与を受けていたが, 心不全のため入院。Digoxin 投与後, 接合部調律となり, QT 間隔が 0.55秒と延長し, 単形性持続性心室頻拍と多形性心室頻拍が出現した。薬剤起因性 Tdp と診断し, 直流除細動後, MgSO₄ 2.47g 静注した。投与後, 心室頻拍の再発はなかった。2例とも Mg 投与による副作用はなかった。薬剤起因性 Tdp の治療に MgSO₄ が有効かつ安全と考えられ, 緊急治療に有用であると思われた。

2) 気管・気管支外傷の4例

吉谷 克雄・広野 達彦
小池 輝明・滝沢 恒世
矢沢 正知・大和 靖
中沢 聡・江口 昭治 (新潟大学第二外科)

吉川 恵次 (新潟大学附属病院 救急部)

桜井 淑史・青木英一郎 (新潟市民病院 第二外科)

交通外傷による頸部気管断裂の2例, 気管・気管支断裂の1例, 小児の気管支損傷の1例を報告する。いずれも外傷後の呼吸困難, 皮下気腫, 気胸などの症状で発症し, 気道確保のための気管切開, あるいは気管支鏡にて確診を得た後, 手術により救命した。

外傷性気管・気管支の損傷は稀であり, 合併する他臓